ガリヴァ旅行記

K・Cに

原民喜

この頃よく雨が降りますが、今日は雨のあがつた空にむくむくと雲がただよつてゐます。今日は八月六日、ヒロシマの惨劇から五年目です。僕は部屋にひとり寝転んで、何ももう考へたくないほど、ぼんやりしてゐます。子供のとき、僕は姉からこんな怪談をきかされたのを、おもひだします。ある男が暗い夜道で、怕い怕いお化けと出逢ふ。無我夢中で逃げて行く。それから灯のついた一軒屋に飛込むと、そこには普通の人間がゐる。吻と安心して、彼はさきほど出逢つたお化けのことを相手に話しだす。すると、相手は「それはこんな風なお化けだらう」と云ふ。見ると、相手はさつ

きのお化けとそつくりなのだ。男はキヤツと叫んで気絶する。――この話は子供心に私をぞつとさすものがありました。一度遇つたお化けに二度も遇はすなど、怪談といふものも、なかなか手のこんだ構成法をとつてゐるやうです。

先日から僕はスウイフトのガリヴア旅行記をかなり詳しく読み返してみました。小人国の話なら子供の頃から聞かされてゐます。夏の日もうつとりとして、よく僕は小人の世界を想像したものです。子供心には想像するものは、実在するものと殆ど同じやうに空間へ溶けあつてゐたやうです。さういへば、少年の僕は、

船乗になりたかつたのです。膝をかかへて、老水夫の話にきき入つてゐる少年ウオター・ロレイの絵を御存知ですか。あの少年の顔は、少年の僕にとても気に入つてゐたのです。

地図を愛し版画を好む少年には
宇宙はその広大なる食慾に等し。
ああ！　ランプの光のもと世界はいかに大なることよ！
されど追憶の眼に映せばいかばかり小なる世界ぞ！

ボードレールは「航海」といふ詩で、かう嘆じてゐま

すが、僕自身は今でもまだ人生の航海を卒業してゐない人間のやうです。

しかし、近頃の新聞記事を読むと、何だか、この地球はリリパットのやうに、ちつぽけな存在に思へて来るのです。卵を割つて食べるのに、小さい方の端を割るべきか、大きい方の端を割るべきか、と、二つの意見の相違から絶えず戦争をくりかへさねばならないほど、小ぽけな世界に……

だが、小人国から大人国、ラピユタ、馬の国と、つぎつぎに読んで行くうちに、僕はもつとさまざまのことを考へさせられました。この四つの世界は起承転結

の配列によつて、みごとに効果をあげてゐるやうですが、僕を少しぞつとさせるのは、あの怪談に似た手のこんだ構成法でした。

小人国からの帰りに、ガリヴアは船長にむかつて体験談をすると、てつきり頭がどうかしてゐると思はれます。そこでポケツトから小さな牛や羊をとり出して見せるのです。そして、その豆粒ほどの家畜をイギリスに持つて帰つて飼つたなどといふところは、まだ軽い気分で読めます。しかし、大人国からの帰りには、ガリヴアは箱のなかにゐて、鷲にさらはれて海に墜されて、船で救はれるのですが、ここでも船員たちとガ

リヴアとの感覚がまるで喰ひちがつてゐます。最初私を発見したとき何か大きな鳥でも空を飛んでゐなかつたかと、ガリヴアが訊ねると、船員の一人は、鷲が三羽北を指して飛んでゐるのを見た、が大きさは別に普通の鷲と変つたところはなかつたと答へます。もつとも非常に高く飛んでゐたので小さく見えたのだらうとガリヴアは考へるのですが、これは少し念が入りすぎてゐるやうです。そして、こんな手法は馬の国からの帰航では更らに陰鬱の度を加へてくりかへされてゐます。ここでは人間社会から逃げようと試みるガリヴアの悲痛な姿がまざまざと目に見えるほど真に迫つて訴

へて来ますが、奇妙なのは船長とガリヴァの問答です。はじめ彼の話を疑つてゐた船長が、さういへば、ニューホランドの南の島に上陸して、ヤーフそつくりの五六匹の生物を一匹の馬が追ひたててゆくのを見たといふ人の話をおもひだした、といふ一節があります。実に短かい一節ながら、ここを読まされると、何かぞつと厭やなものがひびいて来ます。何のために、こんな念の入つたフイクシヨンをつくらねばならなかつたのかと、僕には、何だが痛たましい気持さへしてくるのです。

身振りで他国の言語を覚えてゆくとか、物の大小の

対比とか、さういふ発想法はガリヴア全編のなかで繰返されてゐます。この複雑な旅行記も、結局は五つか六つの回転する発想法に分類できさうです。だが、それにしても、一番、人をハツとさすのは、ヤーフが光る石（黄金）を熱狂的に好むといふところでせう。僕は戦時中、この馬の国の話を読んでゐて、この一節につきあたり、ひどく陰惨な気持にされたものです。陰鬱といへば、この物語を書いた作者が発狂して、死んで行つたといふことも、ゴーゴリの場合よりももつと凄惨な感じがします。

また僕は五年前のことをおもひ出しました。原爆あ

との不思議な眺めのなかに――それは東練兵場でしたが――一匹の馬がゐたのです。その馬は負傷もしてゐないのに、ひどく愁然と哲人のごとく首をうなだれてゐました。

（二五・八）

底本：「日本の原爆文学1」ほるぷ出版
１９８３（昭和58）年８月１日初版第一刷発行
初出：「近代文学」
１９５１年４月号
入力：ジェラスガイ
校正：大野晋
２００２年７月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。